



Title	看護短期大学学生の3年間のエゴグラムの変化
Author(s)	武藤, 真佐子
Citation	北海道大学医療技術短期大学部紀要, 12, 75-86
Issue Date	1999-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/37644
Type	departmental bulletin paper
File Information	12_75-86.pdf



原 著

看護短期大学学生の3年間のエゴグラムの変化

武藤真佐子

Changes in the Egograms of Nursing College Students over Three Years

Masako Buto

Abstract

Three Year “egograms” of students from a college of nursing were produced using TA (transactional analysis). They were “horizontally” and “vertically” analyzed to provide suggestions for basic nursing education, with the following results:

- 1) The characteristics of the egograms of these students changed from the AC (adapted child) dominant type with a high C (child) value in the freshmen year to the N type with two NP (nurturing parent) and AC peaks at the time of graduation.
- 2) The A (adult) ego state changed the most over three years, followed by NP and CP (controlling parent). Out of the five ego states, the value of A was initially the lowest but rose to third highest at the time of graduation in both types of analysis.
- 3) Among the students with N-type egograms in the first half of their freshman year, three did not show the types of changes expected to occur by graduation and their A values remained low (according to a vertical analysis of each student).

From the above results, it was found that expected changes in the A, NP and CP states occurred in the process of basic nursing education. Analysis results suggest that it is necessary to begin paying attention to the A condition in the education of freshmen in order to raise the value to the first or second highest level among other states by graduation. Mean values for egogram states were used for the analysis.

Key Words: transactional analysis, egograms, nursing college students,
basic nursing education

要 旨

本研究は、看護基礎教育に示唆を得ることを目的とした。看護短大生に交流分析を用いて、3年間実施したエゴグラムのデータを横断的ならびに縦断的に分析した。

結果、1) 学年のエゴグラムの特徴は、当初子供の自我状態「AC」を高値とする「AC」優位型から、卒業時点には親的な自我状態「NP」と「AC」を頂点とするN型へと変化した。2) 3年間に変化した自我状態は順に、大人の自我状態「A」、親的な自我状態「NP」と「CP」であった。「A」は当初最低値で経過し、卒業時点の「A」は両分析とも3位であった。3) 1学年前期にN型の学生の中で、卒業時点に期待される変化を示さなかった3名の縦断的分析では、「A」が低値で経過していた。

以上から、全体として「A」、「NP」、「CP」は、看護基礎教育において期待され育っていた。「A」は、1学年から教育的配慮が重要であり、卒業時点には1～2位へと高く機能するように育つことの必要性が示唆された。

キーワード：交流分析，エゴグラム，看護短期大学学生，看護基礎教育

I. はじめに

3年間の看護基礎教育の卒業時期には、思いやる、支える等、自我状態では「思いやる私：NP」が高く働くように育つことが期待される。事実に基づいて判断する、筋道をたてて考える、といった思考力が育成されると自我状態「考える私：A」の心的エネルギーは高まる。この自我状態が高まっていくには、専門性に必要となる確かな知識・概念、価値づけ、自己の看護観、役割と責任を引き受ける・引き受けさせる、行動規範が育つ必要があり、自我状態では「価値づける私：CP」が働かなければならない。価

値づけることができ、専門知識に裏づけられ、知的能力が高くなることによって、全体を系統だてて判断する、看護過程を視野に入れて考える、この場合の自我状態は「考える私：A」である。看護専門職者の基礎教育では、「考える私：A」が確かに成長していなければならない。自由な感性の自我状態「ありのままの私：FC」が、場の状況に応じてふさわしく感情をコントロールし、自分らしさを表現する力が育つてくると、「考える私：A」が「ありのままの私：FC」より高く働くようになる。藤井¹⁾は、FCの高い学生が自己の感情に気づき、患者との距離をとれるようになり、Aが機能するようになって、患者－看護者関係が機能していくと述べている。川端²⁾は、実習成績とエゴグラムとの相関について、対象の症状・障害および心理的背景を把握した看護では、Aと成績は正の相関となることを示した。FCの高い学生が、不安や悩みを多く抱える対象の看護で、衝動的・直感的、子供っぽさが強く現れる場合は、FCと成績は負の相関となり、「AC」の高い学生が、障害を乗り越えて自立していこうとしている対象に、顔色をみる・妥協的・我慢する態度での看護では、ACと成績が負の相関となると述べている。「考える私：A」が「合わせる私：AC」より高く働くと、「合わせる私：AC」は本来の調和した傾向になる。

このように看護基礎教育における学生の自我状態に関する研究が行われてきているが、縦断的調査は不足している。そこで、今回、本研究では、看護基礎教育の自我状態に対する効果をさらに明らかにし、今後の看護基礎教育の方向性に新たな示唆を得ることを目的に、看護学生のエゴグラムを3年間、横断的・縦断的に調査したので、その分析結果を報告する。

〈基本概念と用語の定義〉

E. Berneが提唱した交流分析(TA: Transactional Analysis)では、人の心の働き(自我状態・心のエネルギー)は、親的な自我状態

Parent: CP-Controlling Parent-, NP-Nurturing Parent-, 大人の自我状態Adult: A, 子どもの自我状態Child: FC-Free Child-, AC-Adapted Child-の5つの自我状態で構成されるとする。エゴグラムはこの5つの自我状態のエネルギー配分をグラフ化したもので、Jhon・M・Dusay³⁾によって開発された。

- 1) 自我状態の基本概念については、「こころの自画像E・G・Oグラフの要素」アカデミアTA改訂(1987.9)版を表5-2)に掲げた。この表には、「A考える私」の「本来の働きが過剰な状態」は空欄になっている。改訂前には、理詰めの私-①割り切りすぎる, ②味もそっけもない, ③心情を無視する, ④データを過信する, ⑤打算的である(勘定高い)-の要素が位置していたが、改訂版から①④⑤はCP過剰に, ②③はNP不足に位置づくとし, Aにおける過剰な状態はないとした。

用語の使用について, 以下の語は同じ意味として使用する。CP-「価値づける私: CP」, NP-「思いやる私: NP」, A-「考える私: A」, FC-「ありのままの私: FC」, AC-「合わせる私: AC」とする。

- 2) エゴグラムのどの自我状態が優位かにより便宜上の呼び名を型として分類した。CPを最高値とするエゴグラムをCP優位, 同様にA優位, NP優位, FC優位, AC優位, NPとACの2つを頂点とする場合をN型, CPとFCの2つを頂点とする場合を逆N型, CPとAとACを頂点とする場合をW型とした。さらにCP最低値型とA最低値型とFC最低値型に分類した。

- 3) 看護専門職者として期待されるエゴグラムの範囲を次の3型とする。①NP優位「への字型」; NPを最高に, 次にAが高く, CPもAについて高く機能しており, 自分らしくありのままのFCも中央値より高く, ACは中央値に近く協調性のあるエゴグラム。②A優位「ベル型」; Aを頂点として最高に機能し, NPと

CPへと, FCとACへと下がっていくエゴグラム。③N型(NP>AC, A>CP); NPとACの2つを頂点とし, NPがACより高く次にAがCPより高いエゴグラムで, やがてNP優位あるいはA優位のエゴグラムに変化する可能性のあるエゴグラム。

期待されるエゴグラム①②③の理由; ①と②について, 稲葉⁴⁾は, 短大3年目における実習前後のエゴグラムとCAS(不安性格診断)との関係について, CAS正常群では, 実習前はNPとAを高値とする山型, 実習終了後はNP優位の「への字型」であったと述べ, 武藤^{5,6)}は, 看護者1年目のエゴグラムはNPがACより高いN型で, 2年目以降はNP優位の「への字型」へと変化した, また看護者が描く実在する理想の看護者像がA優位の「ベル型」であったとの報告による。③については, 多田⁷⁾と佐藤⁸⁾は, 3年課程看護学生の全体的なエゴグラムはN型で, NP最高値, 次にAC, その次にA, そしてCP, FCであったとの報告から, 看護基礎教育の結果を現している。このことは, 武藤の報告「看護者1年目のエゴグラム傾向はN型(NP>AC, A>CP)」と関連があり, また看護者2年目以降にNP優位エゴグラムへと変化する傾向にあることから, 成長・発展するエゴグラムとしてとりあげた。

Ⅱ. 方 法

I看護短期大学の1・2・3学年の学生を対象に, 平成7年度から9年度の3ヶ年間に実施した質問紙エゴグラム(E・G・Oグラフ)を用いて横断的に分析した。さらに平成7年度入学生(63人)をとりあげ縦断的に分析した。

調査対象は, 18~21才が97.98%, 22~26才が2.02%, 全員女性であった。

調査期間は, 平成7~9年度の前期と学年末で, 前期は, 全学年7月7日~7月24日に実施した。学年末は, 1・2学年は2月17日~3月16日に, 3学年は平成7~8年度の卒業時期(3

月6日～3月10日)と、平成9年度の実習終了時期(12月8日)に実施した。

調査方法は質問紙による集合調査、延べ総数は1,065人(内訳は表1参照)である。研究期間は、平成10年8月1日から平成11年3月20日である。

使用したエゴグラムは「こころの自画像を描く」(アカデミアTA, 表5-1), 2)参照)である。これは50の質問からなり, CP, NP, A, FC, ACの内容をランダムに含む。各質問には, 「はい」から「めったに」の4段階で回答させた。

分析は, 「はい」「いつも」は3点, 「しばしば」は2点, 「ときには」は1点「いいえ」「めったに」は0点とし, CP, NP, A, FC, ACの点数を集計した。エゴグラムは横軸に各自我状態を, 縦軸に心のエネルギー(0～30点)をとり作成し, 平均点を使用した。

3年間の自我状態の変化を卒業時点(a)との差(c)からみた。1学年前期エゴグラムのCP・NP・AがFC・ACより低値を示したことから, 前者の伸びをみるため前者には最小値を, それに連動して変化する後者をみるため後者には最大値を使用した(b)。従って $c=a-b$ の関係が成り立つ。

Ⅲ. 結 果

1. 平成7から9年度在校生の横断的分析

1) 1・2・3学年前期と学年末エゴグラム(表1, 図1-1)参照)

エゴグラムの特徴は, 1学年前期から3学年前期までは, AC優位のエゴグラムで3学年学年末はN型であった。1学年のエゴグラムは, 1位と2位がACとFCであった。2学年学年末は, 最高値はACで, 2位のNPはFCを越えた。3学年前期に, A (19.8 ± 4.1 [SD]) は, CP (19.7 ± 3.4 [SD]) とほぼ同値であるが, 順位はCPを越え4位となった。3学年学年末は, NP (21.7 ± 3.8 [SD]) が最高値となり, AC (21.4 ± 3.6 [SD]) は2位となった。A (20.9 ± 4.0 [SD]) とCP (20.3 ± 3.2 [SD]) の順位は3位と4位に上がり, 最低値はFC (20.0 ± 3.9 [SD]) であった。事実に基づいて考える自我状態AはCPとFCより高くなった。

2) 3学年学年末(卒業時点)を規準にした各自我状態の変化(表1参照)

3学年学年末の自我状態の値を規準として, 1学年前期～3学年前期までの各自我状態の値の差をみると, Aは+2.8, NPは+1.7, CPは+1.1, FCは-0.9, ACは-0.2であった。

表1 1・2・3学年 前期と学年末におけるエゴグラム

平成7・8・9年度入学生

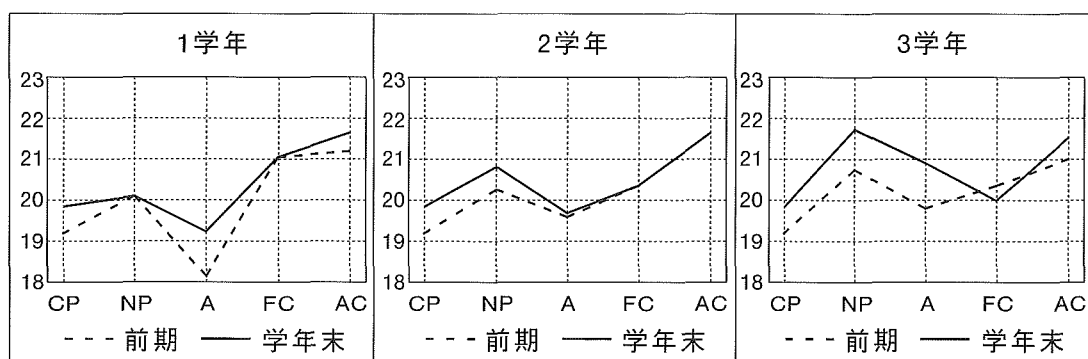
	N	CP		NP		A		FC		AC		心的エネルギー		優位 エゴグラム
		MEAN	S.D.	MEAN	S.D.	MEAN	S.D.	MEAN	S.D.	MEAN	S.D.	MEAN	S.D.	
1年 前期	189	19.2	3.9	20.1	4.0	18.1	4.3	20.9	4.9	21.2	4.0	99.5	14.2	AC優位
1年学年末	186	19.8	3.4	20.0	4.1	19.2	4.1	21.0	4.5	21.6	3.6	101.0	13.6	AC優位
2年 前期	127	19.8	3.9	20.2	4.2	19.6	4.1	20.3	4.4	21.5	4.3	101.1	14.9	AC優位
2年学年末	188	19.8	3.6	20.8	3.8	19.7	4.2	20.4	4.4	21.5	3.7	102.2	13.9	AC優位
3年 前期	193	19.7	3.4	20.7	4.1	19.8	4.1	20.3	4.1	21.0	4.0	101.5	14.2	AC優位
3年学年末	182	20.3	3.2	21.7	3.8	20.9	4.0	20.0	3.9	21.4	3.6	104.4	13.4	N型
c = a - b		+1.1		+1.7		+2.8		-0.9		-0.2				

注: 3学年学年末のエゴグラムを規準とした場合の自我状態の変化を差でみる $c=a-b$ 。

a: 3学年学年末のエゴグラムの値

b: 1学年前期から3学年前期までの期間におけるCP・NP・Aの最小値, FC・ACの最大値。

看護短期大学学生の3年間のエゴグラムの変化



1 学年前期 N = 189,
1 学年学年末 N = 186,

2 学年前期 N = 127,
2 学年学年末 N = 188,

3 学年前期 N = 193,
3 学年学年末 N = 182,

図1-1) 平成7～9年度在学学生 1・2・3学年の前期と学年末におけるエゴグラム (平均値)

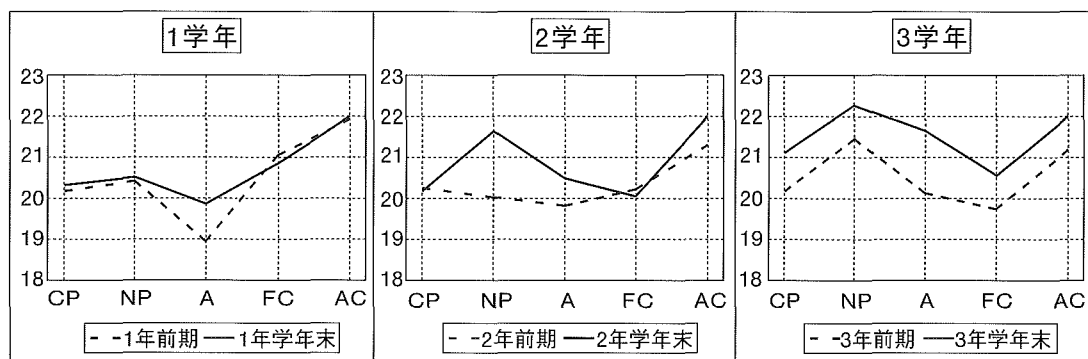


図1-2) 平成7年度入学生 1・2・3学年 前期と学年末エゴグラム (平均値)

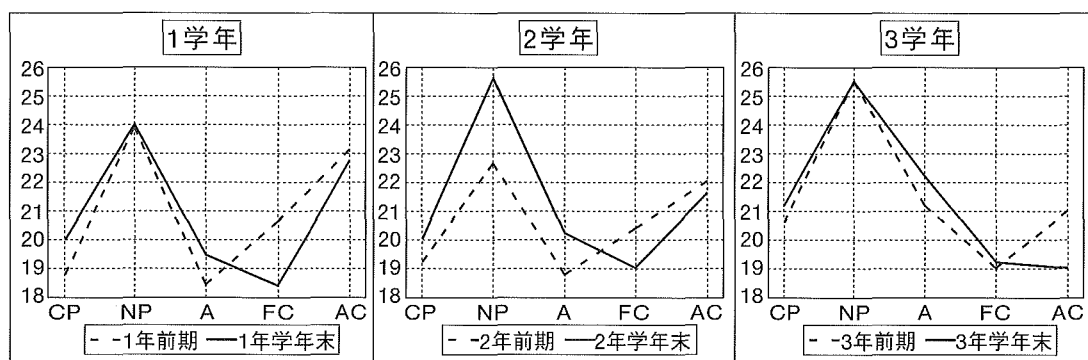


図1-3) 平成7年度入学生 3学年学年末「NP優位エゴグラム」(平均値)

2. 平成7年度入学生の縦断的分析

1) 1・2・3学年前期と学年末エゴグラム
(表2, 図1-2)参照)

エゴグラムの特徴は, 1 学年前期は, 「考える私:A」を最低値 (18.9 ± 4.3 [SD]), 「合わせる私:AC」を最高値 (21.8 ± 4.3 [SD]) とする

AC優位で、1 学年学年末と 2 学年前期もAC優位のエゴグラムであった。2 学年学年末以後はN型である。3 学年のN型は、NPがACより高値であった。

2) 3 学年学年末を規準にした各自我状態の変化 (表 2 参照)

3 学年学年末 (卒業時点) の自我状態の値を

規準として、1 学年前期から 3 学年前期までの各自我状態の値の差は、Aは+2.9, NPは+2.2, CPは+1.1, FCは-0.4, ACは-0.1であった。

3) 3 学年学年末における学生のエゴグラム (表 3 参照)

(1)エゴグラムの変化状況

「期待される方向へ変化した」学生は36.5%

表 2 1・2・3 学年 前期と学年末におけるエゴグラム

N = 63 平成 7 年度入学生

	CP		NP		A		FC		AC		心的エネルギー		優位 エゴグラム
	MEAN	S.D.	MEAN	S.D.	MEAN	S.D.	MEAN	S.D.	MEAN	S.D.	MEAN	S.D.	
1 年 前 期	20.1	3.9	20.4	4.5	18.9	4.3	21.0	5.2	21.8	4.3	102.2	14.9	AC優位
1 年 学 年 末	20.3	3.1	20.5	4.4	19.8	3.8	20.7	4.1	22.0	3.6	103.2	13.6	AC優位
2 年 前 期	20.2	3.6	20.1	4.4	19.8	4.3	20.3	4.4	21.3	4.1	101.7	15.6	AC優位
2 年 学 年 末	21.1	3.1	21.6	3.9	20.5	4.1	20.1	4.1	21.9	3.4	104.3	14.1	N型
3 年 前 期	20.2	3.5	21.6	4.4	20.3	4.3	19.8	4.4	21.2	4.1	103.0	15.3	N型
3 年 学 年 末	21.2	2.9	22.3	3.7	21.7	3.8	20.6	4.2	21.9	3.7	107.7	13.6	N型
c = a - b	+1.1		+2.2		+2.9		-0.4		-0.1				

注：3 学年学年末のエゴグラムを規準とした場合の自我状態の変化を差でみる<c=a-b>。

a：3 学年学年末のエゴグラムの値

b：1 学年前期から 3 学年前期までの期間におけるCP・NP・Aの最小値, FC・ACの最大値。

表 3 3 学年学年末におけるエゴグラムの状況

- 期待される方向へ変化した, 変化していない, 期待されない変化 -

N=63 (100%) 平成 7 年度入学生

		期待される方向 へ変化した		期待されるように 変化していない		期待されない変 化		計	
		人	%	人	%	人	%	人	%
		23	36.5	35	55.6	5	7.9	63	100
エ ゴ グ ラ ム の 優 位 に よ る	NP優位	5	7.9	0	0	0	0	5	7.9
	A 優位	7	11.1	0	0	0	0	7	11.1
	N 型	11	17.5	0	0	0	0	11	17.5
	CP優位	0	0	2	3.2	2	3.2	4	6.4
	FC優位	0	0	6	9.5	0	0	6	9.5
	AC優位	0	0	9	14.3	0	0	9	14.3
	逆 N 型	0	0	5	7.9	0	0	5	7.9
	W 型	0	0	4	6.4	1	1.6	5	7.9
	CP最低値型	0	0	0	0	1	1.6	1	1.6
	A 最低値型	0	0	7	11.1	1	1.6	8	12.7
	FC最低値型	0	0	2	3.2	0	0	2	3.2

注：N型；NPとACが優位のエゴグラム, 逆N型;CPとFCが優位, W型;CPとAとACが優位

(23/63人),「期待されるように変化していない」学生は55.6%,「期待されない変化をした」学生は7.9%であった。「期待される方向へ変化した」学生のエゴグラムは, NP優位, A優位, N型にみられた。「期待されるように変化していない」学生のエゴグラムは, CP優位, FC優位, AC優位, 逆N型, W型にみられた。「期待されない変化」をした学生のエゴグラムは, W型, CP最低値型, A最低値型, FC最低値型にみられた。

(2)「期待される方向へ変化した」NP優位エゴグラムの3年間の変化(図1-3)参照)

3 学年学年末にNP優位エゴグラムを示した学生は5人と少数ではあるが, 平均エゴグラムの3年間の変化をみると, 1 学年前期のエゴグラムはN型で, 2つの頂点であるNP (23.8 ± 2.6 [SD])はAC (23.4 ± 2.9 [SD])よりやや高値で, FCは3位, 低値はCP (18.8 ± 4.5 [SD])とA (18.6 ± 3.6 [SD])であった。CPとAは, 1・2・3 学年に共通して前期より学年末に高値を示した。2 学年学年末は, NP (25.6 ± 3.3 [SD])が顕著に最高値を示し, A (20.2 ± 4.4 [SD])も前期より高値となった。FCとACは前期より低くなりNP優位エゴグラムであった。3 学年学年末のエゴグラムは1位NP (25.6 ± 2.0 [SD]), 2位A (22.4 ± 2.3 [SD]), 3位CP (21.4 ± 2.1 [SD]), 4位FC, 5位ACとNP優位のエゴグラムで「への字型」を示した。

4) 1 学年前期にNP優位・A優位・N型を示した学生の3 学年学年末におけるエゴグラム(表4 参照)

(1)エゴグラムの変化状況

1 学年前期にNP優位・A優位・N型を示した学生は33.3%(21/63人)であった。3 学年学年末に期待される方向へ変化した学生は28.6%(18人), 期待されるように変化していない学生は4.8%(3人)であった。NP優位とA優位のエゴグラムの学生は期待される方向へ変化していた。N型の学生は, 期待される方向へ「変化した」は9人, 「変化していない」は3人であった。

(2) 1 学年前期にN型で, 3 学年学年末に期待されるように変化しなかった学生3人それぞれのエゴグラムをとりあげ, 学年変化をみた(図2 参照)。

① 1 学年前期のN型では, 3人それぞれにNPとACはほぼ同値で高く, 最低値の自我状態は, 学生1はFC, 他の2人はAであった。

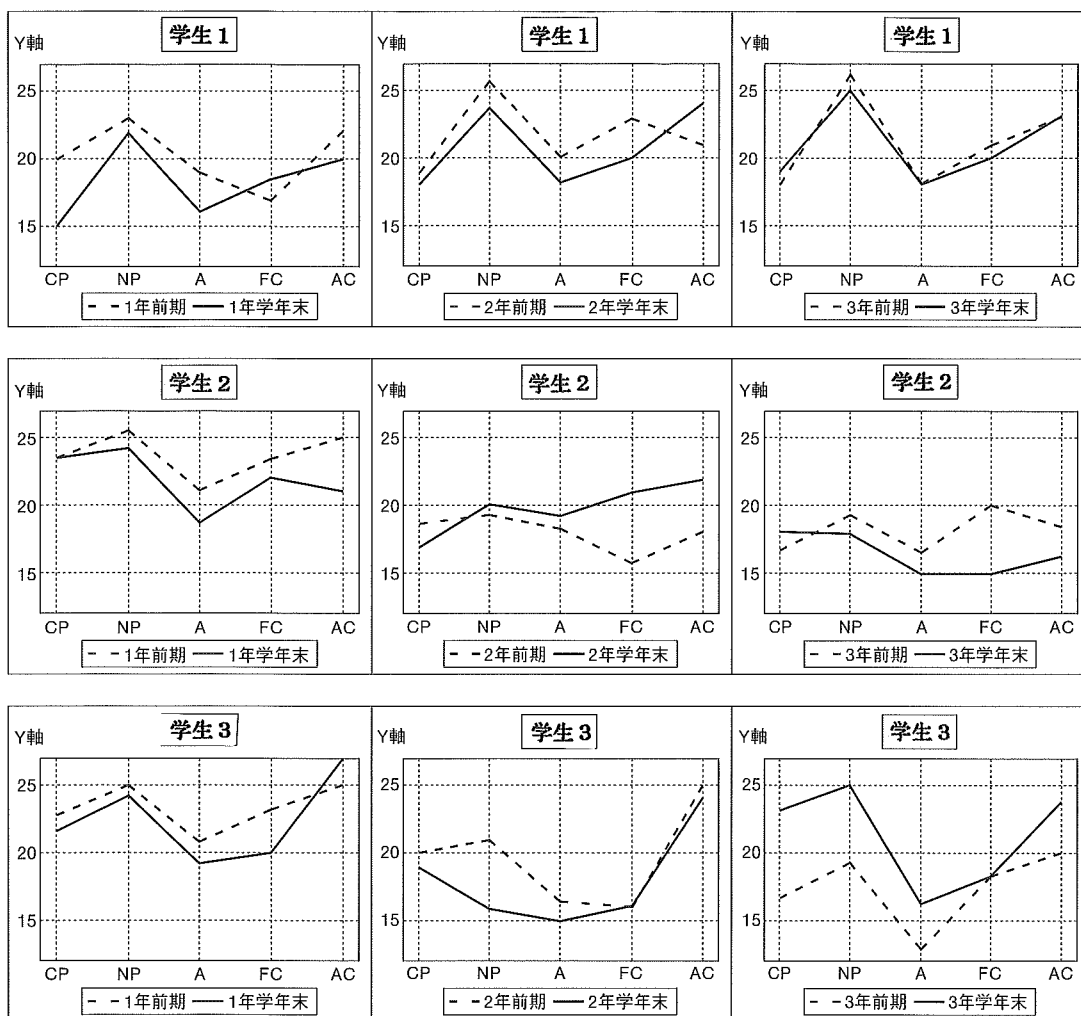
② 3 学年学年末では, 最高値は3人共にNP, 次はACで, 最低値は学生1と3はAで, 学生2はAとFCが同値であった。学生1はN型, 他の2人はA最低値型であった。3人と少数ではあるが, 3 学年学年末エゴグラムの平均値は, NP (22.7 ± 3.3 [SD])を最高値とし, 2位AC (21.0 ± 2.8 [SD]), 3位CP (20.0 ± 2.2 [SD]), 4位FC (17.7 ± 2.1

表4 1 学年前期にNP優位・A優位・N型を示した学生の3 学年学年末におけるエゴグラムの変化

－期待される方向へ変化した, 変化していない－

N=21 (33.3%) N=63 (100%: 学年) 平成7年度入学生

		1 学年前期		3 学年学年末の変化					
				期待される方向へ変化した		期待されるように変化していない		計	
		人	%	人	%	人	%	人	%
		21	33.3	18	28.6	3	4.8	21	33.3
エゴグラムの 優位による パターン	NP優位	7	11.1	7	11.1	0	0	7	11.1
	A優位	2	3.2	2	3.2	0	0	2	3.2
	N型	12	19.0	9	14.3	3	4.8	12	19.0



平成7年度入学生

図2 1学年前期にN型を示した学生の中で、3学年学年末に期待するように変化していない学生3人のエゴグラム（平均値）

[SD]), 最下位はA (16.3 ± 1.3 [SD]) のN型であった。心的エネルギーの総和は 97.7 ± 10.4 [SD]であった。低値で経過したAの3年間の平均値は 17.7 ± 2.1 [SD]であった。

3. 3年間の心的エネルギーの比較

平成7から9年度（横断的分析，表1）における心的エネルギーの総和を比較すると，1学年前期が 99.5 ± 14.2 [SD]と最も低く，3学年学年末は 104.4 ± 13.4 [SD]と最高であった。心

的エネルギーは，各学年に共通して前期より学年末に高く，学年の進級に伴い高くなった。また，平成7年度入学者（縦断的分析，表2）における比較では，各学年共に100を越え，3学年学年末は 107.7 ± 13.6 [SD]と最高であった。各学年の傾向は，横断的分析と同様の傾向を示した。

Ⅳ. 考 察

カリキュラムは，1学年と2学年の前期と後

期の前半までは学内における学習が中心である。2学年の後期の後半(1月～3月)から3学年前期の前半(4～6月)と、後期の前半(10～12月)までは臨床実習で、各々の看護学で学んだ内容は、実習を通して学生の内面に統合されていく時期である。

1. エゴグラムの変化の特徴

エゴグラムは全体として、AC優位エゴグラムからN型エゴグラムへと変化していた。AC優位エゴグラムは、1学年前期から早くも2学年前期迄(縦断的分析)、遅い場合は3学年前期迄(横断的分析)長期間みられた。縦断的分析における3学年学年末のN型は、NPはACよりやや高値、AはCPとFCよりやや高値で、前記の佐藤と多田の報告「看護学生の全体的なエゴグラムN型」にほぼ類似していた。

2. 3年間の自我状態の変化とその意味

最も変化の大きかったAは、横断的分析では、2学年学年末迄最低値で、3学年前期ではFCより低値であった。2学年後期の後半から展開する看護学実習では、事実即して把握し、全体を統合してとらえるといったとり組みが常に行われている。少人数制で、臨床の指導者と教員から直接学習の援助が得られる。このことは、Aが最も機能する学習期間である。しかしAがFCを越えたのは、3学年前期も過ぎた学年末の時点であった。縦断的分析では、Aが最低値であったのは、2学年前期迄で、3学年前期以降は3位と、横断的分析より半期ずれていた。

両分析に共通して、次の様な傾向がみられた。3学年学年末(卒業時点)を規準に、他の学年(前期と学年末)の自我状態の差は、大きい順に、1位はA、2位はNP、3位はCP、4位はFC、5位はACであった。CP・NP・Aの変化を成長とみると、看護基礎教育において顕著に成長しているといえる。

常に高値を示した「AC」では、差は最も小

さく、変化しにくい傾向であった。川端⁹⁾は、実習成績とエゴグラムについて、ACの高い学生は、成績とACに負の相関がある、合わせ過ぎ・妥協の看護者の対応は、真の援助関係を学んでいないと示唆している。

また、3年間を通してFCはACより低値で、自分を抑え他者に合わせる傾向であった。個が尊重される温かな場、自己主張が認められ、民主的対人関係を創り出す専門家集団のいる環境の重要性が示唆された。

3. 「思いやる私：NP」について

両分析共にNPは、1学年では変化はみられず、CPとAが上昇した後、2学年学年末の実習終了時期からやや高く変化し、卒業時点では最高値の自我状態を示した。看護学実習では、学生一人が患者一人を受け持ち、信頼関係を築くことを基本に、学生は受容的態度で対応できるよう自覚的に努力する。3学年の学年末には、AはCPを越え、NPはさらに顕著に高くなった。このことは、実習の影響が大きいことを示唆する。

4. NP優位エゴグラムについて

縦断的分析による5人の学年変化は、2学年前期までNPがACよりやや高いN型で、2学年学年末から顕著なNP優位エゴグラムとなった。3学年学年末は、NP・A・CPが1～3位を占める、NP優位の「への字型」となり、期待されるエゴグラムを示した。看護学実習において、学生5人の共通点は、事実即して把握でき、看護観は明確で、自己推進力も高かった。看護場面では患者を見守り、支え、共に行い励ましていた。「待つ」ことに工夫と配慮をして対応し、相手の喜ぶ状況から満足を得、目標の達成度は高かった。稲葉他¹⁰⁾の報告では、CAS正常群のエゴグラムでは、2・3学年の実習前後4回の推移について、1回目ではAを、2回目ではNPを頂点としたN型、3学年3回目ではAを、

4 回目ではNPを頂点とした山型に変化した。武藤の報告でも、看護者の成熟性のエゴグラムが、N型（NP>AC）から「への字型・ベル型」へと変化したとある。これらからNP優位エゴグラムの5人の学生は、卒業時点には看護専門職者としての基礎的な内容が育っているといえる。

5. 1 学年前期にN型（NPとACを頂点とする全てのN型）を示した学生の中で、3 学年学年末に期待されるように変化していない学生（3 人の縦断的分析）について

共通の自我状態の傾向は、NPが最高であったが、Aは最低値であった。またCPとACが同値の場合とCPのみ低値がみられた。看護学実習において、学生3人に共通した点は、優しく丁寧な対応をしていたが、自信のない言動が目立った。視野が狭く同じ時点にとどまっている傾向であった。エゴグラムとCAS（性格診断）との関係について、武藤¹¹⁾は高不安群のエゴグラムの特徴はAが最低の傾向であったと述べ、稲葉¹²⁾も、高不安群のエゴグラムはN型でAは低い傾向にあるといい、外的刺激による影響を受け易くストレスを生じる可能性が高いという。AがFC・ACより低値であることから、実際に即した対応がとりにくく、さらに、緊張・不安傾向になりやすい。予期情報の提供と時期を得た対処へのサポート等、Aが機能しやすい配慮が1 学年の当初から重要となることが示唆された。

職業的な瞬時の行動について、植木・武藤等¹³⁾等は、瞬時の判断に、即座に行動が伴う職業的行動は、「考える私：A」の瞬時の観察と「価値づける私：CP」に蓄積された経験・価値・規範による行動類型が瞬時に連動して起こると報告している。これらを総合すると、看護基礎教育では、「考える私：A」と「価値づける私：CP」が機能する学習が要となることが示唆された。

6. 心的エネルギーについて

心的エネルギーは、進級に伴い高かった。3 年の在学期間は、青年期にある学生が発達課題である自己同一性の確立、異性を意識し親密になる、また職業との同一性を培う、将来を展望するといった日常生活の営みの中で、勉学・実習に取り組み、これらが全体として影響を及ぼして成長する年代である。学生の自我状態の心的エネルギーが3 カ年を通して、常に高くなっていることは、健康的で正常な成長が進行していることだといえる。

V. 結 論

以上から次のことが明らかになった。

1. エゴグラムの特徴は、AC優位エゴグラムからN型エゴグラムへと変化した。AC優位エゴグラムは、1 学年前期から早くも2 学年前期迄（縦断的分析）、遅い場合は3 学年前期迄（横断的分析）長期間みられた。
2. 3 年間の看護基礎教育において、自我状態の伸びた順はA、NP、CPで、期待する方向に変化していた。ACは1～2 位と3 年間高く機能し、変化しにくく、他者を受け入れ合わせる傾向であった。専門職者として自己の判断に基づき、責任をもち、積極的な対応は弱い傾向が明確になった。このことはA・NP・CPはさらに十分に機能するように育つ必要があることが示唆された。
3. 「考える私：A」は、2 学年学年末まで最低値で経過し、3 学年学年末は3 位であった。1 学年前期にN型の学生の中には、Aが低値で経過し、卒業時点でもA最低値の学生が少数だがみられた。このことから、1 学年の当初より、自己に関心を向け、自己に気づく経験、自己をとりまく環境と具体的に主体的に関わる経験を豊かにし、事実在即して考え判断するAが育つように配慮し、卒業時にAが、1～2 位へと高く機能するように育つよう援助する必要性が示唆された。

4. 「思いやる私：NP」は、CPとAが上昇した後で、実習開始した学期から上昇し、3学年学年末のエゴグラムでは、NPは最高値となり、実習の影響が大であることが示唆された。

5. 卒業時点（3学年学年末）のNP優位エゴグラムの中に「への字型」の学生が少数みられた。このことは看護専門職者としての基礎的な内容が育っていることが示唆された。

VI. おわりに

今回の研究では、3カ年間の看護学生のエゴグラムの変化を検討し、看護教育の方向性と課題を明確にできた。この研究の限界は、エゴグラムが自分の自我状態のイメージであることにある。その時・場の状況・相手に対してとる行動のイメージは固定的ではなく変化する。「今・ここ」でのありようを受けとめ、変化の方向性をみていくことになる。このことをふまえて、今後の課題に取り組みたい。

謝 辞

長期間、調査に協力して下さいましたⅠ看護短期大学の学生に感謝致します。また、植木清直先生（アスノ経営管理者医業研究所）には、これまで医療・看護と交流分析の研究にご指導下さり、今回も温かくも厳しいご助言をいただき、本研究をまとめることができました。心から感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 藤井博英：実習指導の客観的一指標としてのエゴグラム導入. 看護展望 16 (5) : 75-80, 1991.
- 2) 川端寿美子他：実習成績とエゴグラムとの相関についての一考察(第2報)：看護展望 13 (9) : 11023-1027, 1988.
- 3) ジョン・M・デユセイ：エゴグラム. 新里里春訳, P. 169, 創元社, 1985.
- 4) 稲葉佳江・丸山知子：看護学生の性格特性と自我状態の変化. 交流分析研究 14 (1・2) : 9-16, 1991.
- 5) 武藤真佐子：エゴグラムからみた看護者の成熟性の特徴. 第26回日本看護学会-看護管理分化学会集録集 : 30-33, 1995.
- 6) 飯田真佐子他：エゴグラムからみた看護婦の成熟性について. 看護展望 11 (9) : 34-43, 1986.
- 7) 多田昭栄・尾方美智子：エゴグラムによる看護学生の自我状態の観察. 第15回看護教育分科学会集録集 : 132-135, 1984.
- 8) 佐藤恵子：看護学生の自我状態の傾向および実習指導に望むもの. 神奈川県立看護大学校紀要 : 37-44, 1986.
- 9) 川端寿美子他：前掲2)
- 10) 稲葉佳江・丸山知子：前掲4)
- 11) 武藤真佐子：本学学生の性格特性とエゴグラムの特徴-2年次学年末におけるCAS不安得点毎エゴグラム-. 岩手女子看護短期大学紀要第4号 : 17-31, 1998.
- 12) 稲葉佳江・丸山知子：前掲4)
- 13) 植木清直・武藤真佐子他：「瞬時のふれあい」を分析する研究—第6報職業的な瞬時の行動について. 第23回日本交流分析学会学術大会抄録 : 2, 1998.
- 1) 藤井博英：実習指導の客観的一指標としてのエゴグラム導入. 看護展望 16 (5) :

表 5

1) エゴグラムの質問項目

1 事実で判断します。	26 人をまるごと受け入れます。
2 食事を楽しまします。	27 筋道をたてて話します。
3 経験の主にして物事を決めます。	28 人を勇気づけます。
4 相手の意見や主張に合わせます。	29 「してはいけない」といいます。
5 人をはめます。	30 言われた通りにします。
6 話の内容を確かめます。	31 詳しい計画を立てます。
7 相手に同意を求めます。	32 自分から進んでします。
8 人の世話をします。	33 約束事を守ります。
9 感じたままに表現します。	34 みんなと協力します。
10 しきたりや習慣を守ります。	35 人を育てます。
11 まわりの人に合わせます。	36 いろいろなことに興味があります。
12 人にやさしくします。	37 素直にあやまれます。
13 人に認められようとします。	38 自分でしたことに責任を持ちます。
14 自分の意見を言います。	39 テキパキと処理します。
15 細かに観察します。	40 感じたとおりにします。
16 人によく思われるようにします。	41 おだやかに事を運びます。
17 人を信頼します。	42 好き嫌いを感じたままに言います。
18 人の言うことに従います。	43 やり方などを教えます。
19 過不足や適否を判断します。	44 したことを振り返ります。
20 相手を批判します。	45 相手の気持ちを受け止めます。
21 事実を踏まえて予測します。	46 決めたことはやりとげます。
22 おもいつきがあります。	47 現実にはないことを想像します。
23 礼儀作法を守ります。	48 人にゆるやかに接します。
24 必要な情報を集めます。	49 気軽に行動します。
25 のびのびと振る舞います。	50 人の話を終わりで聞きます。

2) 自我状態の基本概念 <こころの自画像 E・G・O グラフの要素>

本来の動きが不足な状態		本来の働きの状態	本来の働きが過剰な状態
価値づけできない私 ① 話を鵜呑みにする ② 決められない ③ 責任をとれない ④ あいまいである ⑤ だらしない	CP 価値づける私	価値づける私 ① 経験に基づいて価値づける ② 文化・伝統を守る ③ 規律・規範に従う ④ 教える ⑤ 責任をとる・とらせる	価値を押しつける私 ① 決めつける ② 押しつける ③ 干渉する ④ こだわる ⑤ 独断する
相手を思いやれない私 ① 人への配慮がない ② 人への関心が薄い ③ 温かみがない ④ 愛情がもてない ⑤ 冷淡な態度をとる	NP 思いやる私	思いやる私 ① 認める ② 受け容れる ③ 信頼する ④ 育てる ⑤ 慰める	相手を甘えさせる私 ① 過保護な ② 甘やかす ③ 世話をしすぎる ④ 相手に尽くす ⑤ 過剰に期待する
観察・調整できない私 ① 正確に観察できない ② 現実に対応できない ③ こころの働きの過不足を調整できない ④ 記録や確認が甘くなる ⑤ 評価や判断が適切でない	A 考える私	考える私 ① 現実に適応する ② 筋道をたてて考える ③ 情報を取捨選択する ④ 事実に基づいて判断する ⑤ データに基づいて評価する	
楽しめない私 ① 感じたことの表出が少ない ② 表情が固い ③ 陰気くさい ④ 萎縮している ⑤ 気力が出せない	FC ありのままの私	ありのままの私 ① 感じたまま表現する ② のびのびしている ③ 想像力がある ④ 直感する ⑤ やる気がある	わがままな私 ① 自分さえよければ良い ② 羽目をはずす ③ 調子に乗る ④ 度をすごす ⑤ 軽率である
合わせられない私 ① 引き込み思案になる ② 自分から働きかけられない ③ 聞かれないと応えられない ④ 口数が少ない ⑤ 存在感がうすい	AC 合わせている私	合わせている私 ① 協調する ② 協力する ③ 指示に従う ④ 従順である ⑤ 人当たりがよい	自分を抑え込んでいる私 ① すぐ妥協する ② よく思われたがる ③ 依存する ④ 遠慮する ⑤ つまらないことを気にする

アカデミア T A 改訂(1987.9)版では、自我状態の配列が発達段階の順であったものを、著者がエゴグラムに合せて変更した。著者注；「A 考える私；過剰な状態」が空欄になっている。改訂前は、理詰めの私—①割り切りすぎる、②味もそっけもない、③心情を無視する、④データを過信する、⑤打算的である(勘定高い)ーが位置していたが、改訂版から①④⑤はCP過剰に、②③はNP不足に位置づけられ、過剰な状態というのではない。